令和５年度

印西市民アカデミーだより

第17号

講座18：「本埜白鳥の郷」見学他

１月12日(金)、「本埜白鳥の郷」見学前に本埜支所東方向にある笠神社(かさがみしゃ)と蘇波鷹神社(そばたかじんじゃ)、鳥見愛宕両社(とりみあたごりょうしゃ)を見学しました。

笠神社と蘇波鷹神社は、戦国時代後半、千葉氏重臣原氏の笠神城跡エリアにあります。どちらの神社の境内にも庚申塔が数多く建てられています。笠神社には、高さ４５～６０ｃｍ前後の画一的な駒型庚申塔が境内の左右に並んでいます。慶應元年～三年(1865~1867)の３年間の年銘を持つ典型的な多石百庚申で、青面金剛像塔１７基、「庚申塔」銘の文字塔７８基のほか、破損した廃石塔５基があり、合わせて１００基が建てられています。さらに、５基の単独で建てられた庚申塔もあります。蘇波鷹神社には、駒型の「庚申塔」銘の文字塔５４基と、青面金剛像塔６基の計６０基が建てられています。百庚申には４０基足りないが６０という数は干支の一周の数でもあり、また狭い境内(笠神城の見張台があったところ)に合わせた数であったと推測されています。造立時期は、明治１６年(1883)に８基、明治３３年(1900)に１９基、昭和１０年(1935)に３３基で、建立に三次にわたって５２年間かかっており、近代に入って笠神地区の三世代の人々により造塔が継続されたことは他に類を見ません。

境内の両側に整然と並ぶ笠神社の百庚申

鳥見愛宕両社は、鳥見神社と愛宕神社の両社を祀っている神社です。本埜支所と道路を挟んだ独立した小高い丘の上に鎮座しています。一の鳥居の扁額にその社名(右写真)が書かれており、どういう経緯で両社が祀られるようになったのか興味がわいてきます。現在も三社では小正月に神事オビシャが行われています。

４年連続で「本埜白鳥の郷」に１０００羽を超える白鳥(1月12日現在：1135羽)が飛来しています。オオハクチョウ、コハクチョウ、アメリカコハクチョウの三種類が見られます。本郷は、1992 年に 6 羽の白鳥が農業用排水路工事で一時的に水を溜めていた水田に飛来したことに始まります。翌年「本埜白鳥を守る会」が発足し、以来約３０年にわたって保護活動を続けています。白鳥は例年１０月ごろから飛来し始め、２月末ごろから３月上旬にかけて徐々にシベリアに帰っていきます。帰るころになると長い距離(３０００～４０００㎞)を飛ぶために食べる量を減らしてダイエットをします。一気にシベリアまで飛ぶのではなく、北海道の湖沼(ウトナイ湖、宮島沼)などに一旦集結し、４月下旬ごろ日本を飛び立ちシベリアの繁殖地に渡ります。無事帰郷できることを願います。

甘酒飲みながらベンチに座ってゆったり見学